

# 劉向の災異解釈における分野説への依拠とその三統説

南部 英彦

Liu-Xiang (劉向) 's Dependence on Fen-Ye-Shuo (分野説) in Interpretation of Natural Desasters and His San-Tong-Shuo (三統説)

NAMBU Hidehiko

(Received September 25, 2020)

## はじめに

前漢後期の劉向(前79～前8<sup>①</sup>)の災異説の特徴に関する先駆的な研究として、田中麻紗巳氏の「劉向の災異説」<sup>②</sup>がある。田中氏は、劉向の災異説について次のようにいう。すなわち、災異思想は、災異と原因あるいは結果としての人事とが種々な理論を媒介として結びつけられる面と、その結びつけを通して説者の意思が展開される面とがあり、前者は災異思想そのものの機構もしくは構造、後者は災異思想の機能又は目的と呼ぶことができる。劉向は、『洪範五行伝』に基づいて歴史上の具体的な災異を解説した『洪範五行伝論』十一篇を著しており、『漢書』五行志所収の彼の説はこの著から採られている。五行志所収の劉向説の機構は『五行伝』の説を中心とし、その機械論的な性格を補足するものとして象数易・陰陽(気)の考えが採用され、更に前兆の意味を加えるのに、天の考え(天戒若曰)が使われた。ただし、天には前兆の意味を認めるだけで予言には進まなかった。田中氏が、劉向の災異説の機構・構造と機能・目的を分け、その機構では『五行伝』の説、象数易・陰陽(気)・天の考えが用いられ、その天は前兆の意味をもつとしたのは受け継ぐべき重要な指摘である。ただ、劉向の災異説の機構に用いられる天は前兆の意味をもつだけで予言には進んでいないとする点については、この天戒が天の言葉として予言であるという板野長八氏の指摘<sup>③</sup>もあり、今後用例にもとづく検討により見直しを図る余地

が残されている。『漢書』五行志所収の劉向説をながめると、この「天戒若曰」として示される天戒とは別に、劉向自身の在世中に起こった異変に対する彼の解釈が予言に進んでいる次の例がある。

【X】成帝の河平三年二月丙戌、犍為の柏江山崩れ、捐江山崩れて、皆江水を靡ぐ。江水逆流して城を壊し、十三人を殺す。地震積むこと二十一日、百二十四たび動く。元延三年正月丙寅、蜀郡の岷山崩れて、江を靡ぐ。江水は逆流し、三日にして乃ち通ず。劉向以為へらく、周時岐山崩れ、三川竭きて、幽王亡ぶ。岐山は周の興る所なり。漢家は本蜀漢に起れば、今起る所の地の山崩れ川竭き、星孛又摂提・大角に及び、参従り辰に至れば、殆ど必ず亡びん。其の後三世嗣亡く、王莽篡位す(成帝河平三年二月丙戌、犍為柏江山崩、捐江山崩、皆靡江水。江水逆流壊城、殺十三人。地震積二十一日、百二十四動。元延三年正月丙寅、蜀郡岷山崩、靡江。江水逆流、三日乃通。劉向以為、周時岐山崩、三川竭、而幽王亡。岐山者、周所興也。漢家本起於蜀漢、今所起之地山崩川竭、星孛又及摂提・大角、従参至辰、殆必亡矣。其後三世亡嗣、王莽篡位)。(五行志下之下)

資料【X】では、成帝の河平三年(前26)の犍為郡柏江山及び捐江山の崩壊と元延三年(前10)の蜀郡岷山の崩壊の記事に対して「劉向以為」として劉向説が示されている。この劉向説では「周時岐山崩、三川竭、而幽王亡。岐山者、周所興也。漢家本起於蜀漢、今所起之地山崩川竭」の箇所ではこれらの山崩れが

漢王朝の発祥の地である蜀漢地方のそれであることを述べ、「星孛又及撰提・大角、従参至辰」の箇所、それと同時に孛星が撰提星・大角星の位置に出現し、かつ参宿から辰宿（房宿）にまで及んだことを述べ、これらの天変地異を根拠にして「殆必亡矣」として漢の滅亡を予言している。予言の後に付された「其後三世亡嗣、王莽篡位」との文は、この劉向の予言が的中したことを班固が示したものと考えられる。このように右の劉向説は、自身の在世中の異変を解釈して漢王朝の滅亡を予言したものである。そして資料【X】が含む劉向説が、漢王朝の発祥の地である蜀漢地方の山崩れに加え、撰提星・大角星の位置と参宿から辰宿（房宿）までの範囲における孛星の出現という二点を漢王朝の滅亡に結びつけることからは、劉向がこの二つの異変を漢滅亡の前兆と捉えていることが分かつるとともに、この劉向説の天人相関の機構が所謂分野説にもとづく可能性を推測できるのである。

そこで本稿では、資料【X】でこの二つの異変を劉向が漢滅亡の前兆と見た理由を、『漢書』所収の他の劉向説を合わせ用いて考察し、災異解釈において予言へと至る劉向の論理を説明することにより、この劉向の災異解釈が分野説にもとづくことを指摘する。そのうえで、『説苑』辨物篇の一節を用いて、劉向の分野説が彼の三統説にもとづくことを指摘したい。

### 一、蜀漢地方の山崩れについて

まず蜀漢地方の山崩れを漢の滅亡の前兆とする理由に関しては、劉向がその直前に「周時岐山崩、三川竭、而幽王亡。岐山者、周所興也」として、岐山の崩壊を周の幽王の滅亡の前兆と捉えていることがその説明の手がかりとなる。ここに周の幽王の滅亡を漢の滅亡に比擬せんとする劉向の意識が存在しているのである。そこで劉向が、岐山の山崩れを周の幽王の滅亡の前兆とする理由を、五行志下之上の「史記周幽王二年、周三川皆震」及び「是歳三川竭、岐山崩」という記事に付された劉向説を通して考えてみたい。

史記周幽王の二年、周の三川皆震ふ。劉向以為へらく、金木水火の土を沓ふ者なり。伯陽甫曰く、周將に亡びんとす。天地の気は其の序を過たず、其の序を過つが若きは、民之を乱すなり。陽伏して出づる能はず、陰迫りて升る能はず。是に於いて地震有り。今三川、実に震ふは、是れ陽其の所を失ひて陰に填がるればなり。陽失ひて陰に在れば、原必ず塞がる。原塞がれば、国亡ぶ。夫れ水は、土演して民用ふるなり。土演す所無ければ、

民財用に乏し。亡びざること何ぞ待たん。昔伊雒竭きて夏亡び、河竭きて商亡ぶ。今周徳は二代の季の如くして、其の原も又塞がる。塞がれば必ず竭く。川竭くれば、山必ず崩る。夫れ国は必ず山川に依る。山崩れ川竭くれば、亡の徴なり。若し国亡びんとすれば、十年に過ぎざるは、数の紀に在りとは、火氣来たりて煎て水を枯らすを謂ふ。故に川竭くるなり。山川の体を連ぬれば、下竭きて上崩るるは、事勢の然ればなり。時に幽王暴虐にして、妄りに誅伐し、諫めを聴かず、褒姒に迷ひ、其の正后を廢す。廢后の父の申侯、犬戎と共に幽王を攻殺す（史記周幽王二年、周三川皆震。劉向以為金木水火沓土者也。伯陽甫曰、周將亡矣。天地之氣不過其序、若過其序、民乱之也。陽伏而不能出、陰迫而不能升。於是地有地震。今三川実震、是陽失其所而填陰也。陽失而在陰、原必塞。原塞、国必亡。夫水、土演而民用也。土無所演、而民乏財用。不亡何待。昔伊雒竭而夏亡、河竭而商亡。今周徳如二代之季、其原又塞。塞必竭。川竭、山必崩。夫国必依山川。山崩川竭、亡之徴也。若国亡、不過十年、數之紀也。是歳三川竭、岐山崩。劉向以為陽失在陰者、謂火氣来煎枯水。故川竭也。山川連体、下竭上崩、事勢然也。時幽王暴虐、妄誅伐、不聽諫、迷於褒姒、廢其正后。廢后之父申侯与犬戎共攻殺幽王。）

右の資料を見ると、「史記周幽王二年、周三川皆震」という史官の記録について「劉向以為へらく、金木水火の土を沓ふ者なり」として、劉向は自身の五行説を付したのち、周の太史の伯陽甫の説を置く。以下、この劉向の五行説の意味するところを、伯陽甫の説との関わりから考えていく。伯陽甫は「周將に亡びんとす」と予言したのち、その判断の理由を述べる。天地の気がその秩序を過つのは、民がこれを乱したのである。陽が押さえられて出られず、陰が迫って上昇できないと地震が起こる。先の三川（涇水・伊水・洛水）の地震は、陽が居場所を失って陰の場所を占め、陽が陰に押さえこまれたために、水源が塞がって川の水が地上を流れずに涸れたためである。川が地上を流れないと民は財用に乏しくなり、その結果、国は亡ぶ。かつて伊水と洛水が枯渇して夏が亡び、黄河が枯渇して殷が亡んだのであり、周徳は今二代の末期と同様であるため、水源が塞がり、川が枯渇した。川が枯渇すると、山が崩れる。そして国は山川に依存するので、山が崩れ川が涸れるのは、滅亡の象徴であるとして、伯陽甫は、三川が涸れた周は滅ぶだろうと予言したのである。ついで「是の歳三川竭き、岐山崩る」という記事は、伯陽甫の予言が的中したことを暗に示す。

この記事についても「劉向以為」として劉向説が付されている。劉向は、伯陽甫のいう「陽失いて陰に在り」とは、火気が水を煮詰めたので川が涸れたことをいうとして、陽と火、陰と水を対応させ、また川の枯渇と山の崩壊は本来一体の現象であるとして、先の伯陽甫の陰陽説を五行説により補う。これによると、先の「劉向以為へらく、金木水火の土を沍ふ者なり」という劉向の五行説は、火（陽）が水（陰）を涸らせたために三川が枯渇し、山崩れが起こったことに対する解釈だと分かる。

それでは、水火が土を乱した原因は何か。伯陽甫の説では「天地之氣不過其序、若過其序、民乱之也」とあって、民が天気を乱したのが原因としたが、問題は民が天気を乱した原因が何かである。この点に関しては、五行志下之上に「成公五年、夏、梁山崩。穀梁伝曰、癰河三日不流、晋君帥群臣而哭之、乃流」とある、魯の成公五年の「梁山崩」という「春秋」経に対する「穀梁伝」を節略した文に付された「劉向以為へらく、山は陽にして君なり。水は陰にして民なり。天戒めて若く曰う。君道崩壊して、下乱れ、百姓將に其の所を失はんとすと。哭して然る後流るるは、喪亡の象なり（劉向以為、山、陽、君也。水、陰、民也。天戒若曰、君道崩壊、下乱、百姓將失其所矣。哭然後流、喪亡象也）」云々という劉向説が参考になる。ここで劉向は山を陽と君に、水を陰と

民に当て、「天戒若曰」として天戒を示して、山崩れと川の枯渇は、君道の崩壊により民が混乱して所を失う前兆だとする。そこで伯陽甫が、今周徳は二代の末期と同様であるとして周の滅亡を予言していたのを合わせ鑑みると、「時幽王暴虐、妄誅伐、不聽諫、迷於褒姒、廢其正后、廢后之父申侯与犬戎共攻殺幽王」という箇所が天気の乱れの要因を述べた部分だろう。つまり劉向は、周の幽王の暴虐な統治こそが民に所を失わせることで天気（陰陽・五行）を乱して三川の枯渇と岐山の崩壊をもたらしたとするのである。君道の崩壊と天気の乱れとの結びつきについては、さらに五行志下之上に「洪範五行伝」の「思心の不容なる、是を不聖と謂ふ。：時に則ち金木水火、土を沍ふ（思心の不容、是謂不聖。：時則有金木水火沍土）」という文に対する「劉向以為へらく、：凡そ思心の傷む者は土気を病み、土気を病めば則ち金木水火、之を沍ふ。故に時に金木水火の土を沍ふこと有り」と曰ふ。「惟」と言はず、独り「時則有」と曰ふは、一衝気の沍ふ所に非ず、其の異の大なるを明らかにするなり（劉向以為、：凡そ思心の傷む者病土氣、土氣病則金木水火沍之。故曰時則有金木水火沍土。不言惟而独曰時則有者、非一衝氣所沍、明其異大也）」という劉向説を参照したい。ここで「思心の傷む者」とは、君主を指す。君主の思慮がだめになると、土気

を病み、土気を病むと金木水火が土気を損なうのであり、洪範五行伝の「時則有」という表現は、一気のみ衝突によって損なうのではなく、異変が大なることを明らかにしたものだとする。実際、先に見た五行志下之上の「史記周幽王二年、周三川皆震」「是歳三川竭、岐山崩」という記事に対する劉向説では「金木水火沍土者」の事例に相当するとしうえで、伯陽甫の説をもとに、水火二気が土を乱したものだとしていたのである。

これらの劉向説を合わせ考えると、劉向は、幽王の暴虐な心と統治の崩壊こそが、天気（陰陽・五行）を損なうて岐山を崩壊へと至らしめた真の原因と見たと考えられる。そのうえで「国の命運は祖国の山川に依り従う」という原則により、岐山の崩壊を周の滅亡の前兆だと捉え、漢の発祥の地である蜀漢地域の山崩れを周代の岐山の崩壊に擬えることで、それを漢滅亡の前兆と見たのである。それでは、蜀漢地域の山崩れが起こった真の原因について劉向はどう考えていたのか。この点については、第二・第三節での考察を終えてから、改めて検討を行うことにしたい。

## 二、大角星・摂提星の位置における孛星の出現について

次に劉向が、大角星・摂提星の位置における孛星の出現を漢滅亡の前兆として見た理由を、『漢書』所収の他の劉向説を用いて考えたい。資料【X】の劉向説に「星孛又及摂提・大角、従參至辰」とあるのは、五行志下之下の「元延元年（前12）辛未、東井に星孛有り。：南に逝き度りて大角・摂提を犯し、天市に至りて節を按じて徐行し、炎、市に入り、中甸にして而る後西に去き、五十六日して倉龍と俱に伏す（元延元年辛未、東井有星孛、：南逝度犯大角・摂提、至天市而按節徐行、炎入市、中甸而後西去、五十六日与倉龍俱伏）」と記される孛星の特徴を簡潔に表現したものだと捉えることができる。そしてここには、この異変に対する「劉向亦曰く、三代の亡ぶるに、攝提方を易ふ。秦・項の滅ぶるに、大角に星孛あり（劉向亦曰、三代之亡、摂提易方、秦項之滅、星孛大角）」という劉向説が付されている。この劉向説は、大角星・摂提星の位置における星孛の出現を、三代・秦・項羽の滅亡の前兆として捉えたものである。そこでまず、大角星・摂提星の位置における孛星の出現を、劉向はなぜに王朝滅亡の前兆と見るとするのかを考えてみたい。

この点の考察に当たり、まず星孛が出現する意味に関する劉向の理解を押さえておきたい。五行志下之下の「文公十四年七月、有星孛入于北斗」という記

事には「劉向以為へらく、君臣朝に乱れ、政令外に虧けば、則ち上に三光の精を濁らせて、五星羸縮し、色を変へて逆行し、甚だしければ則ち孛と為る。北斗は人君の象。孛星は乱臣の類の篡殺するの表なり（劉向以為、君臣乱於朝、政令虧於外、則上濁三光之精、五星羸縮、変色逆行、甚則為孛。北斗、人君象。孛星、乱臣類、篡殺之表也）」という劉向説が付される。劉向は、朝廷の君臣關係が乱れて政令が民に正しく行われなくなると、日月星辰の精気が濁って木火土金水五星の運行が乱れ、変色したり逆行したりし、その甚だしい場合には孛星となるとして、孛星の出現を、乱臣が君位を篡奪する徴表だとするのである。この劉向説にはもとづくところがある。『左伝』昭公十七年の文に「冬に大辰に星孛有り」という異変に対して魯の大夫の申須が「彗とは旧を除き新を布く所以なり。天事の恒象なり（彗所以除旧布新也。天事恒象）」とした言葉がある。『左伝』はここで「星孛」を「彗」と表現し、彗星の出現を「除旧布新」の象徴とする。劉向は、この『左伝』昭公十七年の申須の言葉が示す彗星出現の意味に依拠して、孛星の出現を乱臣による君位篡奪の徴表としたのだろう。

次に、大角星・摂提星の位置に孛星が出現することの意味に関する劉向の理解を考察する。『史記』天官書には「大角は天王の帝廷なり。其の兩旁に各おの三星有り、鼎足のごとく之を句れば、之を摂提と曰ふ。摂提は、斗杓の指す所に直りて、以て時節を建つ、故に摂提格と曰ふ（大角者、天王帝廷。其兩旁各有三星、鼎足句之、曰摂提。摂提者、直斗杓所指、以建時節、故曰摂提格）」として、大角星は天王の帝廷であり、この大角星の兩旁に三星ずつあるのが摂提星で、北斗七星の斗杓の指す位置にあつて時節を測り暦を作る基準となる星だとされる。ここで注目したいのは、天官書に「斗は帝車為りて、中央に運り、四郷を臨制す。陰陽を分かち、四時を建て、五行を均しくし、節度を移し、諸紀を定むるは、皆斗に繋がる（斗為帝車、運于中央、臨制四郷。分陰陽、建四時、均五行、移節度、定諸紀、皆繋於斗）」とあるように、北斗七星は、北極星を中心点として周回し、陰陽・四時・五行の循環を制御するとされていることである。そこで先の「北斗、人君象。孛星、乱臣類、篡殺之表也（五行志下之下）」という劉向説をふまえると、「劉向亦曰、三代之亡、摂提易方、秦項之滅、星孛大角（同上）」という劉向説は、三代・秦・項羽の滅亡時に大角星・摂提星の位置に「除旧布新」の意味をもつ孛星が出現したことを、北斗七星による天氣（陰陽・四時・五行）の制御が不能になることで地上の天子の暦数が喪失した象徴として捉えていたと推測できる。

この推測の正しさを裏付けるのが、成帝の元延年間に、東井宿に孛星が出現

し、蜀郡の岷山が崩れて長江を塞いだという天変地異を重く見た劉向が行った上奏文（『漢書』楚元王伝）である。この上奏文では、『易』賁卦・象伝の「天文を觀て、時変を察す」という言葉を挙げたのち、孔子が哀公に述べた言葉として「夏桀・殷紂暴虐天下、故曆失則摂提易方、孟陬無紀」を挙げて「此れ皆易姓の変なり（此皆易姓之變也）」と述べる。ここにいう「曆」とは、『論語』堯曰篇の堯が舜に与えた言葉に「天之歴數、爾の躬に在り、允に其の中を執れ。四海困窮すれば、天祿永へに終きん（天之歴數在爾躬、允執其中。四海困窮、天祿永終）」とあるような「天の歴（曆）數」、つまり天命を受けた帝王が在位する命數を指すと考えられる。ここで劉向は、夏の桀王と殷の紂王とは暴虐の統治を行つたがゆえに曆數がなくなり、その結果北斗の指す摂提星の方位は不正確になり、「孟陬」つまり曆上の正月は實際の天象と合わなくなったとして、この王者の曆數の喪失を「易姓の變」と表現しているのである。そして、その後文に「秦始皇の末より二世の時に至るまで、日月薄食し、山陵淪亡し、…大角に星孛ありて、大角以て亡ふ。…項籍の敗るるに及ぶや、大角に孛あり（秦始皇之末至二世時、日月薄食、山陵淪亡、…星孛大角、大角以亡。…及項籍之敗、亦孛大角）」とあるので、「劉向亦曰、三代之亡、摂提易方、秦項之滅、星孛大角（五行志下之下）」という劉向説は、上奏文のここまでの趣旨を班固が要約して示したものと分かる。さらにその後文には「漢の秦に入るや、五星、東井に聚まるは、天下を得るの象なり（漢之入秦、五星聚于東井、得天下之象也）」とあり、五星の東井宿への会聚を漢が天命を受けたことの象徴だとする。これは五星の運行の乱れから生じた孛星の東井宿への出現を漢滅亡の象徴とするのとは反対の解釈である。つまり劉向は五星の異変を五行説を用いて解釈し、元延年の大角星及び摂提星の位置における孛星の出現を、君位が篡奪されて漢の曆數が喪失する象徴と見たがゆえに、それを漢滅亡の前兆だと捉えたのである。

### 三、分野説への依拠

前節まで、資料【X】の劉向説で、漢が滅亡するという洞察の根拠とされている漢の発祥の地である蜀漢地域での山崩れと大角星・摂提星の位置における孛星の出現という二つの現象が漢滅亡の前兆と見られる理由を考察した。資料【X】の劉向説についてさらに注目したいのが「星孛又…從參至辰」という箇所である。これは、元延年年に出現した孛星が西方七宿の參宿から南方七宿を

歴て東方七宿の房宿にまで跨がったことを示したものである。実はここに、劉向が災異解釈に分野説を用いていた痕跡がある。『漢書』地理志下には「漢百王の末を承け、国土変改し、民人遷徙す。成帝の時、劉向其の地分を略言したれば、丞相張禹、潁川の朱贛をして其の風俗を条せしむるに、猶未だ宣究せず。故に輯めて之を論じ、其の本末を終えて篇に著す（漢承百王之末、国土変改、民人遷徙。成帝時劉向略言其地分、丞相張禹使屬潁川朱贛条其風俗、猶未宣究、故輯而論之、終其本末著於篇）」として、劉向の分野説を載せている。すなわち

劉向は、①秦地―東井・輿鬼の分野、②魏地―觜・參の分野、③周地―柳・七星・張の分野、④韓地―角・亢・氐の分野、⑤趙地―昴・畢の分野、⑥燕地―尾・箕の分野、⑦齊地―虛・危の分野、⑧魯地―奎・婁の分野、⑨宋地―房・心の分野、⑩衛地―宮室・東壁の分野、⑪楚地―翼・軫の分野、⑫呉地―斗の分野、⑬粵地―牽牛・婺女の分野という具合に、漢の十三の地域を、天官二十八宿に対応させている（ただし、胃宿に対応する分野を欠く）。①の秦地に関しては「其界自弘農故関以西、京兆・扶風・馮翊・北地・上郡・西河・安定・天水・隴西、南有巴・蜀・広漢・犍為・武都、西有金城・武威・張掖・酒泉・敦煌、又西南有牂柯・越嶲・益州、皆宜屬焉」とその分界が記されており、資料【X】で劉向説が付されている山崩れが起きた犍為郡柏江山・捐江山と蜀郡岷山はこの秦地の境界に含まれている。秦地に対応する分野は、東井宿・輿鬼宿である。そこで前節で引用した五行志下下の「元延元年辛未、東井有星孛。…南逝度犯大角・撰提…」という記事を見ると、星孛がこの東井宿の分野で発生したとあり、同じく前節で引用した元延年間の劉向の上奏文の後文に「今日日食尤も屢々あり、東井に星孛あり、撰提の災の紫宮に及ぶは、有識の長老震動せざるもの莫し。此れ變の大なる者なればなり（今日日食尤屢、星孛東井、撰提炎及紫宮、有識長老莫不震動、此變之大者也）」として、東井宿に星孛が出現したとあるのが注意される。東井宿は南方七宿の參に隣接する南方七宿の星宿であることから、資料【X】で「星孛又及撰提・大角、從參至辰」として特筆された東井宿の位置における星孛の出現は、分野説により、東井宿の分野に対応する蜀漢地域の山崩れと連動する現象として劉向において捉えられていたと判断できるのである。第一節で見た劉向説が引く「国必依山川。山崩川竭、亡之徴也」という伯陽甫の説も劉向が用いた分野説の一部として捉えうる。つまり、劉向は天変地異の解釈に分野説を用い、五行説を通じて山陵の崩壊と星孛の出現を一連のものとして結びつけ、それらがいずれも天子の君道の崩壊に原因すると見ることによって漢王朝の命運を洞察していたのである。

#### 四、災異発生の原因について

資料【X】に付された劉向説では、成帝の河平三年及び元延三年に起きた蜀漢地域の山崩れと元延元年の東井宿における星孛の出現に関して、その原因が何であったかを記さない。ただ前三節の考察の結果をふまえるなら、その原因を推測することが可能であると思われる。劉向は、漢の発祥の地である蜀漢の山崩れを周代の岐山の崩壊に擬えており、周の幽王の暴虐な心と君道の崩壊こそが岐山を崩壊へと至らしめた真の原因と見ていた。また劉向は、大角星及び撰提星の位置に星孛が出現したのを、天子の曆数が喪失してその地位が臣下に篡奪される象徴と見ていた。そして蜀漢地域の山崩れと東井宿における星孛の出現を、劉向は、分野説によって連動して起こった現象だと捉えていた。これらによれば劉向は、成帝の統治の在り方を、周の幽王のそれに比擬すべきであり、臣下に篡奪の機会を与えて漢を滅亡へと導く要因をもつものと見たと考えられる。それでは、周の幽王に比擬すべき成帝が犯した君道の崩壊とは何を指すのか。『漢書』楚元王伝に次の記事がある。

成帝即位す。…是の時帝の元舅陽平侯王鳳大將軍と為りて政を乗り、太后に倚りて国権を専らにし、兄弟七人皆封じられて列侯と為る。時に数しば大異有り。向以為へらく、外戚貴盛にして鳳の兄弟事を用ふるの咎なり。而して上方に詩書に精しく、古文を觀て、向に詔して中五経秘書を領校せしむ。向、尚書洪範は箕子の武王の為に五行陰陽休咎の応を陳ぶるを見る。向乃ち上古以来春秋六国を歴て秦漢に至るまでの符瑞災異の記を集合し、行事を推述し、連ねて禍福を伝へ、其の占驗を著し、比類して相從へ、各おの条目有らしむ。凡て十一篇、号して洪範五行伝論と曰ひ、之を奏す。天子の心、向忠精なるが故に鳳の兄弟の為に此の論を起こすを知るも、然れども終に王氏の権を奪ふ能はず（成帝即位。…是時帝元舅陽平侯王鳳為大將軍秉政、倚太后、專国権、兄弟七人皆封為列侯。時數有大異。向以為外戚貴盛、鳳兄弟用事之咎。而上方精於詩書、觀古文、詔向領校中五経秘書。向見尚書洪範箕子為武王陳五行陰陽休咎之応。向乃集合上古以来歴春秋六国至秦漢符瑞災異之記、推述行事、連伝禍福、著其占驗、比類相從、各有条目。凡十一篇、号曰洪範五行伝論、奏之。天子心知向忠精故為鳳兄弟起此論也、然終不能奪王氏権）。

これによると、劉向は、成帝の即位当初に太后の兄弟の王鳳が大司馬大將軍

の地位につき、その兄弟七人が列侯の爵位を得るなど、王氏一族が権勢を振るっていた際に頻発した大異変に対して、それが「外戚貴盛にして、鳳の兄弟の事を用ふるの咎」徴だと解釈した。劉向は詔により宮中の五經の秘書の校讎を統括していた際、『尚書』洪範がかつて箕子が周の武王のために五行・陰陽・休咎の応報を述べたものだとし、そこで上古以来春秋戦国秦漢までに至る符瑞・災異の記事について、対応する過去の事実を追跡してその吉凶禍福を明らかにし、それを種類ごと分類して条目を立て、『洪範五行伝論』十一篇を著して上奏したのである。成帝は、この著が王鳳兄弟のために書き起こされたことを知っていたが、王氏から権勢を奪うことはできなかったと班固はいう。五行志中之下には、元帝初元四年に皇后の曾祖父の濟南東平陵王伯の墓門の梓柱に枝葉が伸びて屋上に張り出したという異変について、「劉向以為へらく、王氏貴盛にして將に漢家に代らんとするの象なり（劉向以為、王氏貴盛將代漢家之象也）」とした劉向説が付されている。劉向は『洪範五行伝論』十一篇を成帝に上奏した際にすでに王氏一族が漢家に取って代わることを洞察していたのである。『漢書』楚元王伝はまた劉向が親友の陳湯に「災異此の如くして、外家日に盛んなり。其の漸劉氏を危うくせん（災異如此、而外家日盛。其漸必危劉氏）」と述べたのち、上奏して「上古を歴て秦漢に至るまで、外戚僭貴なること未だ王氏の如き者有らざるなり。…事勢両ながら大ならず、王氏と劉氏は並び立たず（歷上古至秦漢、外戚僭貴未有如王氏者也。…事勢不兩大、王氏与劉氏亦且不並立）」と訴えたことが記されている。また同・楚元王伝が収める、成帝による国財の浪費を批判する劉向の上奏文では、漢の永統を願う文脈で「王者は必ず三統を通ずるは、天命の授くる所の者は博く、独り一姓に非ざるを明らかにするなり（王者必通三統、明天命所授者博、非独一姓也）」と述べ、王者は三統を通ずることで天命が一姓のみに与えられるのではないことを自覚すべしとする。これによると劉向は、三統説を自己の災異説の根底に据えて災異解釈を行っていたと推測される。成帝期の劉向の脳裏には、成帝が王氏の専横を許したことは漢王朝にとって致命的な失政であり、これにより近い将来、易姓革命に至るという洞察があったと考えられるのである。

このように見ると、五行志下之上が載せる成帝の河平三年・元延三年に起きた蜀漢地域の山崩れと元延元年の東井宿における星孛の出現という天変地異を引き起こした真の原因として劉向が見たのは、外戚王氏の専横を許した成帝の失政だと考えられる。そして、劉向はこれらの災異を漢滅亡の前兆と見たがゆえに、伯陽甫の「周將亡矣」という予言にならって、漢家について「殆必滅

矣」と予言したのだろう。災異解釈が予言に進むというこの点は、劉向の災異説の重要な特徴と見られよう。なお、池田秀三氏は、劉向『洪範五行伝論』が成帝に上奏されたのは、成帝・河平三年（前26）から王鳳が没する陽朔三年（前22）までの間とする<sup>13</sup>。そうだとすると、五行志下之上の資料【X】の劉向説は、成帝・元延三年（前10）以後、死没する哀帝・綏和元年（前8）までの間に劉向が自身の『洪範五行伝論』に加筆したのから班固が採って載せたものだと考えられる。

## 五、『説苑』辨物篇の天人相関論

第一節から第三節までに取り上げた劉向説では、災異解釈において陰陽説・五行説そして分野説が用いられていた。分野説は陰陽・五行の気を媒介に天地と人が相関する範囲・対象を区分して設定するものである。天人相関説を前提とする点で、劉向の分野説は、第四節でふれた彼の三統説と密接な関係にあると考えられる。その点を確認すべく、劉向の三統説との関わりが深いと思われる次の『説苑』辨物篇の一節の天人相関論の内容を捉えたい。

『易』繫辞上)に「仰いで以て天文を觀、俯いて以て地理を察して、幽明の心故を知る」という。いったい天文・地理・人情の現れは(帝王の)心の在り方に依存する。だから心は聖智の府である。そこで古えの聖王は四時の基準を変えて律曆を定め、天文を觀て時世の変化を察し、靈台に登って気の異変の有無を確認したのである。(『論語』堯曰篇に)「堯は曰く、咨爾舜よ。天の曆数は爾の躬に在り。允に其の中を執れ。四海困窮す」とあり、『書』(堯典)に「璿璣(北斗七星の第一〜第四星)・玉衡(北斗七星の第五〜第七星)を在て、以て七政(日月と木火土金水の五星)を齊ふ」とあるのはそのためである。魁(璿璣)・杓(玉衡)の先端の指すところは二十八宿の状況を見て吉凶禍福を占い、また列星の盈縮の変化を見るには、種類を分けて兆候とする。変化を占う基準は二つだけである。二つとは陰・陽の数である。だから『易』繫辞上)に「陰となったり、陽となったりして限りなく変化する働き(の根元)を道という」とあるのだ。道とは、物がその道に由らないことがないものである。だから、万物は根元の道たる一に発り、陰陽の二に成り、天地人の三に備わり、四季・四方にめぐり、五行にゆきわたるといふのだ。それゆえ天象で最も明らかなのは日(陽)・月(陰)のめぐりであり、(陰陽の)變動を推察するには五星より

明確なものはない。天の五星は、氣を五行に運らせている。始め陰陽二氣として起こったその変化は一一五二〇という(万物の)數に極まるのだ。

所謂二十八星は、東方のものを角・亢・氐・房・心・尾・箕と言ひ、北方のものを斗・牛・須女・虚・危・室・東壁と言ひ、西方のものを奎・婁・胃・昂・畢・觜・參と言ひ、南方のものを東井・輿鬼・柳・七星・張・翼・軫と言ふ。宿というのは日月五星の宿場所をいう。この二十八宿の内外をめぐる星々の変化は、対応する二十八宿の官名によって區別する。(天文の変化の)根は皆地上の氣から起こつて、それが天上の変化として花開くのである。所謂五星とは、一に歳星、二に熒惑、三に鎮星、四に太白、五に辰星という。機槍、彗孛、旬始、枉矢、蚩尤之旗は皆五星の盈縮によつて生じたものである。五星が常軌を逸する時には、金木水火土の五行によつて占う。春秋冬夏に五星が見えたり隠れたりするには一定の時節がある。常軌を外れ、時節に合わない場合を變異という。時節に合い、常軌に合う場合を吉祥という(易曰、仰以觀於天文、俯以察於地理。是故知幽明之故。夫天文地理人情之効存於心、則聖智之府。是故古者聖王既臨天下、必變四時、定律曆、考天文、揆時變、登靈台、以望氛氣。故堯曰、咨爾舜、天之歷數在爾躬、允執其中、四海困窮。書曰、在璣璣玉衡、以齊七政。以魁杓之所指二十八宿為吉凶禍福、天文列舍、盈縮之占、各以類為驗。夫占變之道、二而已矣。二者、陰陽之數也。故易曰、一陰一陽之謂道。道也者、物之動莫不由道也。是故發於一、成於二、備於三、周於四、行於五。是故玄象著明、莫大於日月。察變之動、莫著於五星。天之五星、運氣於五行。其初猶發於陰陽、而化極萬一千五百二十。所謂二十八星者、東方曰角・亢・氐・房・心・尾・箕。北方曰斗・牛・須女・虚・危・室・東壁・西方曰奎・婁・胃・昂・畢・觜・參。南方曰東井・輿鬼・柳・七星・張・翼・軫。所謂宿者、日月五星之所宿也。其宿運外内者、以官名別。其根莖皆發於地、而華形於天。所謂五星者、一曰歳星、二曰熒惑、三曰鎮星、四曰太白、五曰辰星。機槍、彗孛、旬始、枉矢、蚩尤之旗、皆五星盈縮之所生也。五星之所犯、各以金木水火土為占。春秋冬夏、伏見有時。失其常、離其時、則為變異。得其時、居其常、是謂吉祥)。

この資料で劉向は、独自の天人相關論を展開する。冒頭に『易』繫辭上伝の言葉にもとづきながら、天地人の相互關係の現れは帝王の心の在り方に依存するといふ。後文で『論語』堯曰篇の言葉を引くように、帝王が中正を守れるか否かは、自身の「天の曆數」を保持できるか否かに直結する。だとすると、帝

王は「天の曆數」を保つために己を天下の統治者として命じた天の意志を確認する必要がある。その確認は『書』堯典にあるように、北斗七星の杓の指す方角の二十八宿をめぐる星々の異變の有無を観察することで行う。そもそも陰陽の働きは根元としての一なる道にもとづき、四季・四方そして五行の働きとして行きわたるとともに、天地人を貫通する。天象の変化は日(陽)・月(陰)および五星(五行)の運行に現れる。そして陰陽の変化は、一一五二〇という万物の數(『易』繫辭上伝)だけ起こる。「其宿運外内者、以官名別。其根莖皆發於地、而華形於天」とは、二十八宿に対応する地上の分野(地域)が區別されており、その分野での陰陽・五行の変化は、二十八宿に宿る日月・五星の運行が一定の軌道・時節に適合するか否かに反映されることをいう。帝王は天文・地理の異變に陰陽・五行の変化を捉え、己の統治が中正であるか否かを占断するのである。

これによると劉向は、天地人の相互關係を想定する陰陽・五行の氣の変化の機構に二十八宿と地上の区域を対応させた分野説を組み込むことによつて説明する、独自の三統説を提示していると認められる。「三統」という言葉こそ用いないものの、「天文地理人情之効存於心、則聖智之府」と述べ、『論語』堯曰篇の「天之歷數在爾躬、允執其中、四海困窮」という言葉を引くのは、天地人の相互關係を統御して天の曆數を保てるか否かは帝王の統治が中正であるか否かにかかるとするもので、それは劉向が「王者必通三統、明天命所授者博、非独一姓也」(第四節で引いた上奏文)として天命は一姓の独占するところではないとした三統説の趣旨と一致する。そしてこの三統を、「易曰、一陰一陽之謂道。道也者、物之動莫不由道也。是故發於一、成於二、備於三、周於四、行於五」として一なる道にもとづけたうえで、陰陽・五行の働きを天地人三統とも感應關係をもつものとして構想したのである。

とりわけ陰陽・五行の変化については「是故玄象著明、莫大於日月。察變之動、莫著於五星。天之五星、運氣於五行。其初猶發於陰陽、而化極萬一千五百二十」と述べ、日(陽)・月(陰)・五星(五行)の氣の変化が占断の際の明確な根拠となり、その変化は万物へと連なっているという。三統を治める位置に在る帝王と日月・星辰との氣を通じた相關については、「五行志下之上に、『洪範五行伝』の「皇之不極、是謂不建。：時则有日月乱行、星辰逆行」という文に対する「説(解説)」として「皇の不極、是を建てず」といふ。皇は君なり。極は中なり。建は立なり。人君の貌言視聽思心の五事皆失ひ、其の中を得ざれば、則ち万事を立つる能はず。：凡そ君道の傷む者は天氣を病む。「五

行沚天」と言はずして、「日月乱行、星辰逆行」と曰ふは、下の敢へて天を沚わざるが若しと為す（皇之不極、是謂不建。皇、君也。極、中。建、立也。人君貌言視聽思心五事皆失、不得其中、則不能立万事。：凡君道傷者病天氣。不言五行沚天、而曰日月乱行、星辰逆行者、為若下不敢沚天」とあるのが参考になる。君主が貌・言・視・聽・思心の五事（『書』洪範）のすべてがだめになり、中正を保てなくなると、万事を治められなくなる。すると、それにより天氣を損なうて、日月の運行が乱れ星辰が逆行するという現象が起こるとする。辨物篇で二十八宿に宿る五星が「盈縮」する、つまりその運行が軌道と時節を乱した結果、彗星の出現を引き起こすのは、右の『洪範五行伝』の「説」にいうように君道の崩壊を象徴する現象だということになる。辨物篇に「五星之所犯、各以金木水火土為占」とあるのは、劉向がこの『洪範五行伝』の「説」のような形で、人（君主）の五行と天の五行との感応関係を想定することを示すだろう。この点からすると、『漢書』五行志に採られた『洪範五行伝論』の劉向説はこの陰陽説・五行説・分野説を組み込んだ自身の三統説を理論的前提とすると考えうる。

辨物篇に見られる劉向の三統説についてさらに注目したいのは、この論説が易伝と『春秋繁露』の思想との関連が深いことである。それは第一に宇宙の根元としての「一」を指定する点である。辨物篇は、繫辭上伝の「一陰一陽之謂道」を引きながら「道也者、物之動莫不由道也。是故発於一、成於二、備於三、周於四、行於五」と述べ、根元的理法としての「一」なる道が二（陰陽）・三（天地人三統）・四（四時・四方）・五（五行）の働きを統括する構図を示す。一方、『易』繫辭上伝に「易に太極有り。是れ兩儀を生ず。兩儀は四象を生ず。四象は八卦を生ず（易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦）」とあり、『春秋繁露』五行相生篇に「天地の氣は合して一と為る。分かれて陰陽と為り、判れて四時と為り、列れて五行と為る。：五行は五官にして、相生に比ひて相勝を問ふなり。故に治を為すに、之に逆らへば則ち乱れ、之に順へば則ち治まる（天地之氣、合而為一。分為陰陽、判為四時、列為五行。：五行者五官也、比相生而間相勝也。故為治、逆之則乱、順之則治）」とある。辨物篇の一―二―三―四―五という陰陽の発生と展開の図式は、太極―兩儀―四象―八卦という易伝の生成論と一―陰陽―四時―五行という『繁露』の天地の氣の展開の図式をふまえ、『繁露』の一―二―四―五という陰陽・五行を一にもとづけた数の系列に天地人の三統を加えたものだろう。『繁露』五行相生篇では、一を天地の氣の合したものとし、五行の相生ないし相勝の原則に逆らえば乱れるが、従えば

治まるとして、世の治乱が帝王の統治の如何によるとする点に劉向の三統説と同様の考え方を含んでいる。そもそも三統という考え自体、易伝・『繁露』と関係が深い。『易』説卦伝に「昔者聖人の易を作るや、將に性命の理に順はんとす。是を以て天の道を立てて陰と陽と曰ひ、地の道を立てて柔と剛と曰ひ、人の道を立てて仁と義と曰ふ。三才を兼ねて之を兩にす。故に易は六画にして卦を成す。陰を分け陽を分け、柔剛を迭用す。故に易は六位にして章を成す（昔者聖人之作易也、將以順性命之理。是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義。兼三才而兩之。故易六画而成卦。分陰分陽、迭用柔剛、故易六位而成章）」とある。説卦伝では、『易』の目的は人の性命の理に順うことだとして、天道には陰陽を、地道には剛柔を、人道には仁義をそれぞれ対応させ、「三才を兼ねて之を兩にする」ことで、これら天地人三才の働きが易の六位に現れるとする。一方『繁露』三代改制質文篇は、受命改制説の立場から、「正を改むるの義、元を奉じて起る。：然り而して三代正を改むるに、必ず三を以て天下を統ぶ（改正之義、奉元而起。：然而三代改正、必以三統天下）」として、「元」にもとづく三代の改正朔、つまり三正（三統）説を提示する。辨物篇の「備於三」とは、易伝の三才の説と『繁露』の三正（三統）説の双方を受け継ぎ、三統説を立てることと統治の理論が完備することをいうだろう。

第二に三統説の立場から、帝王の取るべき態度として「占爻」（異爻の占断）をいうことである。辨物篇は「一以魁杓之所指二十八宿為吉凶禍福、天文列舍、盈縮之占、各以類為驗。夫占爻之道、二而已矣」所謂宿者、日月五星之所宿也。其宿運外内者、以官名別。其根莖皆發於地、而華形於天。：五星之所犯、各以金木水火土為占」という。ここでは、地上に根をもつ天象の変化を、陰陽説・五行説を用いることで、帝王にとっての未来の命運を占うことが「占爻」の役割である。この点も易伝・『繁露』とのつながりをもつ。『易』繫辭上伝に「易は天地と準ふ。故に能く天地の道を弥綸す。仰ぎて以て天文を觀、俯いて以て地を察す。是の故に幽明の故を知る（易与天地準。故能弥綸天地之道。仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故）」とある。「仰以：」以下は辨物篇でも引かれていたが、『易』は天地に擬えて作られており、天地の道を覆い尽くしている。そこで『易』により天文・地理を觀察することで、幽遠な、または著明な現象を知ることができるという。そしてこの立場から繫辭上伝は「天は尊く地は卑しくして、乾坤定まる。：天に在りては象を為し、地に在りては形を為して、変化見はる（天尊地卑、乾坤定矣。：在天成象、在地成形、變化見矣）」「生生、之を易と謂ふ。象を成す、之を乾と謂ふ。法を効す、之を坤と謂ふ。

数を極めて来を知る、之を占と謂ふ。変を通ずるを事と謂ふ。陰陽測らず、之を神と謂ふ（生生之謂易、成象之謂乾、効法之謂坤、極數知来之謂占、通變之謂事、陰陽不測之謂神）とも述べて、陰陽の神妙なる変化によって万物を絶えず生み出す働きを『易』と言い、天に象を成す乾の働きと地に法を効す坤の働きをもとに、その数を極めて未来を知るのが「占」であるとする。ここでの「数」とは何か。繫辞上伝によると、「天一地二、天三地四、天五地六、天七地八、天九地十」という具合に天地はそれぞれ合計二十五・三十という数を持ち、これを合わせた五十五という数が神妙な変化を生み出す。そして、乾卦を得るための策数（陽爻 $6 \times 36$ 策）の216と坤卦を得るための策数（陰爻 $6 \times 24$ 策）の144を足した360は、一年の日数に当たる。また易上下二篇に含まれる六十四卦の陽爻・陰爻の数がそれぞれ192なので、六十四卦の策数は（ $36 \times 192 + 24 \times 192$ ）11520という数となり、これが万物の数に相当する。「極數知来之謂占」とは、『易』に秘められた天地万物に固有の数を極め尽くすことで未来を予知することを「占」とするものである。辨物篇に「其初猶発於陰陽、而化極万一千五百二十」とあったように、劉向はこの易伝のいう象数にもとづく占断を重んじる考えを承けている。一方、『繁露』二端篇に「日蝕、星隕、彘有り、山崩、地震、夏に大雨水あり、冬に大雨雹あり、隕霜草を殺さず、正月自り雨ふらずして秋七月に至り、鸚鵡の巢に来たる有り、春秋之を異とするは、此を以て悖乱の徴を見ればなり。…孔子の此を以て之を効すは、吾が微を貴び始を重んずる所以なり。夫の災異の象を前に推して、然る後安危禍乱を凶を悪むは、春秋の甚だ尊ぶ所に非ざるなり（書日蝕、星隕、有彘、山崩、地震、夏大雨水、冬大雨雹、隕霜不殺草、自正月不雨至於秋七月、有鸚鵡來巢、春秋異之、以此見悖乱之徴。…孔子以此効之、吾所以貴微重始是也。因惡夫推災異之象於前、然後凶安危禍乱於後者、非春秋之所甚貴也）」とある。『繁露』二端篇は日蝕以下の諸異変を『春秋』が記すのがそれが君主の「悖乱の徴」だからであり、孔子の『春秋』は物事の「微・始」を重んじるのだとして、「災異の象」を予見して「安危禍乱」を凶るのが『春秋』の重んじる精神であるという。この二端篇の『春秋』の災異の見方も、辨物篇の天文・地理の観察にもとづく「占変」の考えのもとづくところとなっているだろう。

このように見てくると、『説苑』辨物篇が示す劉向の三統説とそれに伴う「占変」の考えは、『易伝（易学）』と『繁露』の説（春秋公羊学）と、そして『洪範五行伝』の説（尚書洪範学）を基軸にして成っていると見られるだろう。

#### おわりに

本稿第二節で引いた成帝の元延年間の東井宿における彗星の出現と蜀郡の岷山の崩壊に対する劉向の上奏文（『漢書』楚元王伝）の末尾には「易に曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさずと。是を以て卦を設け爻を指して、復た義を説く。天文は以て相曉り難ければ、臣図上ると雖も、猶口説を須ちて、然る後知るべし。願はくは、清燕の間を賜りて、図を指して状を陳べん（易曰、書不尽言、言不尽意。是以設卦指爻而復説義。…天文難以相曉、臣雖図上、猶須口説、然後可知。願賜清燕之間、指図陳状）」として、『易』繫辞上伝の文により、書は言を尽くさず、言は意を尽くさないからこそ、『易』は卦爻を設けたうえで義を説いているように、天体の現象は分かりにくいので、図を用いたうえで口頭での説明が要するという。資料【X】の劉向の災異説は正しく特定の天変地異（蜀漢地域の山崩れと、東井宿における彗星の出現）から天意を捉え、分野説・陰陽説・五行説による解釈から漢滅亡の予言に進んだのである。劉向自身は、王莽の篡奪による漢の滅亡を目撃しておらず、成帝の死去の前年（前8）に没している。本稿の序でふれたように、資料【X】の末尾に「其後三世亡嗣、王莽篡位」とあるのは、天変地異に対する劉向の解釈が的中したことを、後漢初期の班固が示したものである。この記事と関連して、『漢書』楚元王伝の贊において班固は「劉氏洪範論發明大伝、著天人之応」として、劉向の『洪範五行伝論』が『尚書大伝』つまり『洪範五行伝』を發明して天人の相応を著らかにしたと称賛したうえで「鳴虜、向の山陵の戒を言ふは、今に于て之を察れば、哀しきかな。梓柱を指明して以て廢興を推すは、昭らかなり（鳴虜、向言山陵之戒、于今察之、哀哉。指明梓柱以推廢興、昭矣）」と述べている。ここにいう「山陵之戒」指明梓柱以推廢興」という二事のうち、前者は資料【X】の劉向説（五行志下之上）に当たり、後者は第四節でふれた元帝初元四年の王太后の曾祖父・王伯の墓間の梓柱が上方へ伸長したという異変を王氏が将来漢家に取って代わる象徴だとした劉向説（五行志中之下）に当たる。先の二事に対する「哀哉」「昭矣」との贊の言葉は、班固がこれらの劉向の災異説の洞察の正しさと天命常ならざる歴史の現実に驚歎したことを示している。

『漢書』五行志に採られた『洪範五行伝論』の劉向説は、『説苑』辨物篇が示す独自の三統説を理論的前提としてもつと考えられた。劉向の三統説は、一なる道が二（陰陽）・三（天地人三統）・四（四時・四方）・五（五行）を統括する構造をもっており、またこの三統説を支える学術は易伝（易学）と『繁露』

(春秋公羊学)、そして『洪範五行伝』(尚書洪範学)を基軸にしたものだった。<sup>②</sup>劉向の春秋学に関して言えば、劉向は災異解釈において『穀梁伝』を用い(本稿第一節)、また『左伝』に依拠して説を立てていた(本稿第二節)が、他方、その災異解釈が董仲舒と一致するものが多いこと<sup>③</sup>、また董仲舒・劉向・劉歆の三者が災異解釈に分野説を用いる点で共通することを考え合わせると、劉向においては、董仲舒由来の春秋公羊学がその三伝兼修の学の中に位置付いていたと思われる。なお、劉向が自身の災異説に用いた「天戒若曰」の機能を手がかりとして、董仲舒から後漢光武帝期に至るまでの災異・瑞祥説の展開における劉向・劉歆の位置を見定めることが、今後の課題となる。

## 注

- (1) 劉向の生没年は錢穆『劉向歆父子年譜』(『兩漢經学今古文平議』、東大図書公司印行、一九八九、初出は一九二九)による。
- (2) 田中麻紗巳『劉向の災異説』(『兩漢思想の研究』、研文出版、一九八六の第二章第一節、初出は一九七〇)。
- (3) 板野長八『災異説より見た劉向と劉歆』(『儒教成立史の研究』、岩波書店、一九九五の第八章、初出は一九七二)。
- (4) 本稿で用いる『漢書』の本文は『漢書』(中華書局、一九六二)を底本とする。
- (5) 第二節で引いた『漢書』五行志下之下の「文公十四年、七月、有星孛于北斗」という記事に対する「劉向以為、君臣乱於朝、政令虧於外、則上濁三光之精、五星羸縮、変色逆行、甚則為孛。北斗、人君象。孛星、乱臣類、篡殺之表也」という劉向の解釈に従い、「星孛」を「孛星」と本稿では訳する。
- (6) 分野説については「天をいくつかに区分し、それぞれを地上の一定の区域に配当し、天と地上の間に密接不離の相関関係を認める考え方である」とする富谷至・吉川忠夫訳注『漢書五行志』(平凡社、一九八六)の279頁・注(8)の定義に従う。
- (7) 五行志下之上の「史記」とは、『国語』周語上及び『史記』周本紀の「幽王二年、西周三川皆震」以下の記事が採られていると考えられる。ただしこれらは、五行志下之上の記事との若干の文字の異同があり、『国語』周語上は「伯陽父」に作り、また『国語』『史記』が載せる伯陽甫の説の末尾には「天之所弃、不過其紀」という文がある。なお、劉向はこの記事を『說苑』辨物篇にも収めている。
- (8) 顔師古注に「三川、涇・渭・洛也」とある。
- (9) 本文の「伯陽甫曰」に対する服虔注に「周太史」とある。
- (10) 『史記』周本紀によると、伯陽甫が周の滅亡を予言したその歳に岐山が崩壊し、その三年後に幽王の褒姒への寵愛が始まったことになっている。これに対して、この劉向説は「時幽王暴虐」として、岐山の崩壊はその当時の幽王の暴政が導いたものとするのである。

(11) 『漢書』地理志下の「趙地、昂畢之分壘」に対して王先謙『漢書補注』は「王引之曰昂上当有胃字」云々という。

(12) 本節で引用した『漢書』楚元王伝及び五行志中之下の資料は、拙稿「劉向『說苑』の公私観とその意味」(『山口大学教育学部研究論叢』61、二〇一二)第二節(1) (2)及び第三節(1)で引用したものである。

(13) 池田秀三「劉向の学問と思想」(『東方学報』50、一九七八)第三章の126頁及び注(51)。

(14) 本稿では劉向の『說苑』を成帝の河平四年(前25)から永始四年(前13)までの成立と見ておく(前掲拙稿の序と注(3)を参照)。なお以下に引用した『說苑』辨物篇の一節は、四部叢刊初編子部所収の平湖葛氏伝樸堂藏明鈔本を底本とした。

(15) この資料の「璿璣二玉衡二魁二杓」の語については、『晋書』天文志上に「一至四為魁、五至七為杓二魁四星為璿璣、杓三星為玉衡」とある箇所を参考にして意味を取った。またそれゆえ「在璿璣玉衡以齊七政」という文と、「以其魁杓之所指」という文の中間に位置する「璿璣、謂北辰・勾陳・枢星也」との文は、前後の文脈に合わないため、乱文と見て本文から削った。

(16) この句のあとに「天禄永終」の四字が脱していると考えられる。

(17) 平澤歩『漢書』五行志と劉向『洪範五行伝論』(『中国哲学研究』25、二〇一一)は、『漢書』五行志が「伝曰」として『洪範五行伝』を引いたあとに載せる「説曰」の部分は「夏侯勝・孔光・劉歆等の説ではなく、劉向説である可能性が非常に高い」という。

(18) 以下の繫辞上伝の理解は、韓康伯注・孔穎達疏を参考にしたものである。

(19) この「繁露」二端篇の三句の理解は、岩本憲司「災異説の構造分析—董仲舒の場合—」(『義』から「事」へ—春秋学小史—)、汲古書院、二〇一七、初出は一九九六)の第六章)138頁から139頁の「前徴や予測の重要性を強調している」という理解に従う。

(20) 拙稿「劉歆の三統説・六藝観とその班固『漢書』への影響」(『山口大学教育学部紀要』67、二〇一八)では、劉歆の三統説が、元が三統・五行を統括する構造をもつこと、易学・洪範学・春秋公羊伝を基軸にして成ることを述べた。それゆえ劉歆の三統説は、その基本構造を父の劉向の三統説から受け継いだと考えられる。またこの劉向・劉歆の三統説は一元にもとづく王朝の交代・循環の原理である点で、同拙稿第一節(3)で取り上げた劉向父子の五徳終始説と密接に関わりと考えられる。

(21) 岩本氏前掲論文(142頁)は、『漢書』五行志所収の董仲舒の八十三例の災異解釈のうち、ほぼ半数の四十一例までが劉向と同解釈だとする。

(22) 鎌田正「左伝の成立とその展開」(大修館書店、一九六三)第二編第一章第三節の二では、劉歆の分野説は十二次分野説を以て一貫する特色を示すが、これに対して董仲舒・劉向二氏の所説は、時に二十八宿に本づく分野説を以て占っていることもあるが、必ずしもこれを以て一貫していないとする。